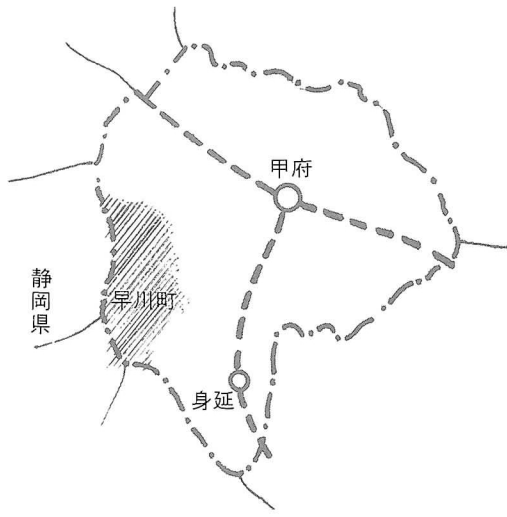


# 山梨県 早川町

## 祖山のおひざもとで とり残された過密寺院



《社会環境の激変》急激な人口流出とともに、集落は消え、寺院はなりたたなくなつた。

山地が総面積の七割を越え、気候風土が厳しく、生産力の乏しい早川町に、江戸期文化年間に一九カ村四、一九〇人が、厳しい自然と闘いながら生活していた。元々強力な地場産業を持たない早川町は、その昔は金と木材を産出し、人口がゆるやかに増え、さらに昭和三〇年代に電源開発で人口が増加し、昭和三五年には一万人を突破して地域に「喜びの灯がともされたか」にみえた。しかし、四〇年代に電源開発事業が終了すると共に、人口の流出が始まり、五五年には三、〇〇五人に激減、現在は三、〇〇〇人を割り、典型的な過疎地域となっている。第一次産業から第二・第三次産業への転換で、若年・壮年層が都市部へ流出した。これらの人口流出・減少は、挙家離村をひき起こし、老人世帯を増加させ、殊に集落共同体の社会的経済的基盤を根底から崩壊してしまつた。

いま、早川町は高齢化社会への対応に迫られている。どの集落も大半が老人世帯の

早川町および周辺の過疎指定地域

町 村 名	人	口	人口減少率%
	昭和35年	昭和55年	55/35
下 部 町	12,028	7,719	35.8
中 富 町	9,783	5,696	41.8
早 川 町	10,679	3,005	71.9
身 延 町	13,805	9,807	29.0
富 沢 町	6,838	5,020	26.6

(昭和57年度過疎対策の現況による)

ため「葬送の棺をかつぐ人がいなくなった」という村人の声は、状況の深刻なことを物語っている。また、町に移って行った老人は、死亡して遺骨になって故郷に帰ってくるという。

近隣の下部町・中富町・富沢町、そして祖山久遠寺のある身延町でさえも、人口の流出は防ぎきれないという現状である。人口の流出は檀家の減少となって現れ、ついに教師の流出をもまねいて住職不在寺院が現れたのである。このような状況は、一方に、教師の生活の保障ができない、常住されては困る、あき寺であった方がよい、という檀家の意識を生む結果にもなった。

《存続困難な住職寺》 挙家離村は寺院の過

早川町日蓮宗寺院の住職常住率

寺院名簿(昭和55年発行)			
内 訳	寺院数	%	
1. 住 職 寺	15	60	
2. 代 務 寺	7	28	
3. 無 住 寺	3	12	
合 計	25	100	

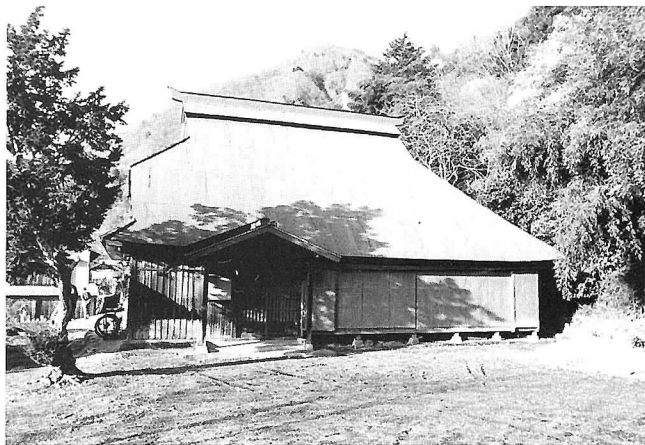
実 態 調 査			
内 訳	寺院数	%	
1-1 住 職 常 任	5	20	
1-2 住 職 不 在	10	40	
2 代 務 寺	7	28	
3 無 住 寺	3	12	
合 計	25	100	

剩過密をもたらし、寺院の存続、住職の常住はますます困難になった。

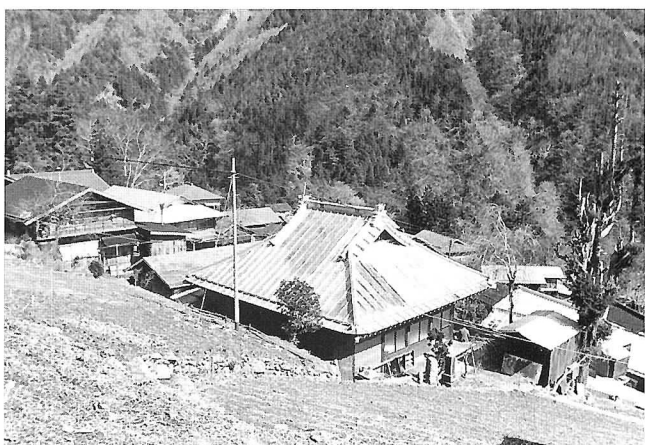
早川町には、他宗七、日蓮宗二三の寺院がある。いずれも中世末から近世初頭に開創され、開基檀越の不明な寺院が多い。祖山久遠寺末五、身延支院末一五、小室妙法寺末三カ寺で、主に祖山関係の寺院によって開教された。

大体、どの寺院も、同族の数十軒程の経済力の乏しい家々の協同負担によって維持されてきた。「衣を着て食べる寺」が七カ寺あったが、大方の寺院は檀家に依存し食べる寺ではなかった。ある寺院では、「なべづる経」といって、小僧の口べらしと読経習得のため、檀家の持回りて各家の仏前で一日中読経し、それによって小僧は三度の食事に接することができた。「早川町の坊主には学問は不要」といわれ、まずは檀信徒と共に寺院あげて額に汗して働くことから教化が始まった。

その結果、早川流域は、日蓮聖人の教えがすみずみまで息づいてきたのである。時には兼業し、狭い耕地を利用し自給自足をして何とか寺院を維持してきた。しかし、



住職無住で雨戸が釘打ちされた寺院



どこにも負けない立派な寺院として護られている山村に残る無住寺院



公民館としての機能を果している寺院(無住寺院)

今は維持すらできない状況に迫られた。  
『日蓮宗寺院名簿』によると、早川町には住職寺一五、住職代務寺七、無住職寺三カ寺あり、代務寺・無住寺が四割をしめている。しかし実態調査で、この住職寺のうち、住職常住は五カ寺しかない(このうち檀家対象の活動寺院一、七面山信仰と結びついたもの四)。残りの一〇カ寺は住職不在、じつに全体で住職常住が二割、住職不在が八割に及んでいた。

その理由は、住職が①名義上のみの住職(住職名義を付けるだけで、実際に住職として法務を勤めることはない)②祖山勤務のため③老齢のため④他地域へ転出のためである。住職寺といっても、寺院自体は無住寺と変わりはない。そうした中で住職と檀家との交流はほとんどない。わずかな檀家のうゑに、挙家離村による檀家

の減少は、住職寺の無住化を起こし、新たに寺院の過密現象をもたらした。しかし、限られた地域に、これだけの寺院数があるということとは、開基当初から常に住職が常住したことは考えないほうが自然ではないか。

《寺院維持の限界》寺院を支える人の減少と、居残った人の高齢化のため、寺院維持は限界にあり、寺院の利用が変わってきた。

早川町の寺院は護持会組織が徹底されており、必要な費用はこれから出されるが、一戸当りの負担は増大し、営繕などの際は倍増される。また、住職名義を借すことにより、課金を負担してもらい、寺院護持の一助としている。さらに維持管理は檀家主導で行われているが、離檀現象と居残った檀徒の老齢化は、寺院の維持を一層厳し

いものになっている。

こうした状況は、檀信徒の意識をより結束させ、強いものになっているようだ。「たとえ最後の一軒になっても菩提寺は護持する」という声が多く、「居残った檀家が少しでも、以前より寺をよくしていく、檀家が減ってもどこにも負けない立派な寺にする、それが自分達の役目だ」という、堅固な使命感がみられた。このような意識によって寺院が辛うじて存続しているのが、早川町寺院の実状である。

そして、総代がみずから寺の維持を勤めている寺院、老人クラブが掃除や題目会を行う、檀家・題目講Ⅱ老人クラブの組織で生きている寺院、村を離れた人々が新年祈禱会にだけ集まる寺院、町が管理して公民館活動・集落舎合いや老人クラブ活動の場

どまらず、地域活動の場というふうには、寺院の利用の仕方が変わってしまった。

《まとめ》住職不在寺院をささえる教師。早川町にみられる急激な人口の減少は、寺院に教師の常住を許さない環境をつくっていた。

かつて常住した教師は、早川町を離れて、それぞれの地で教化に取組んでいる。早川町では、住職不在寺院の増加・残った教師の兼務寺化・老齢化が著しい。

こうした中で、住職不在寺院は、次のような二つのタイプの教師によって守られている。

#### 一、干与人としての教師

一、干与人には、早川町在住が長く、信望の篤い老住職が就任している。護持会の組織化、基本金の積立、堂宇の修理維持、名義上の住職就任などで、その寺院の檀家総代と協義し指導している。住職不在寺で檀家が独自で寺院活動を行っている背景には、干与人の存在が大きな役割を果していると考えられる。

二の法務を担当する教師は、住職不在寺院の檀家の葬儀や供養回向、年中行事の法会など、檀家に依頼されて行なう教師である。

名義上の住職や、遠方に住んでいる代務住職にかわって、早川町に長年在住した教師が、これに当たっている。

人口が少ないとはいえ、広域の交通不便な地域であり、法務を担当する教師の活動は、容易ではない。しかし法務を通じての檀家教化が唯一の接点であり、その活動の使命は大きいといえる。